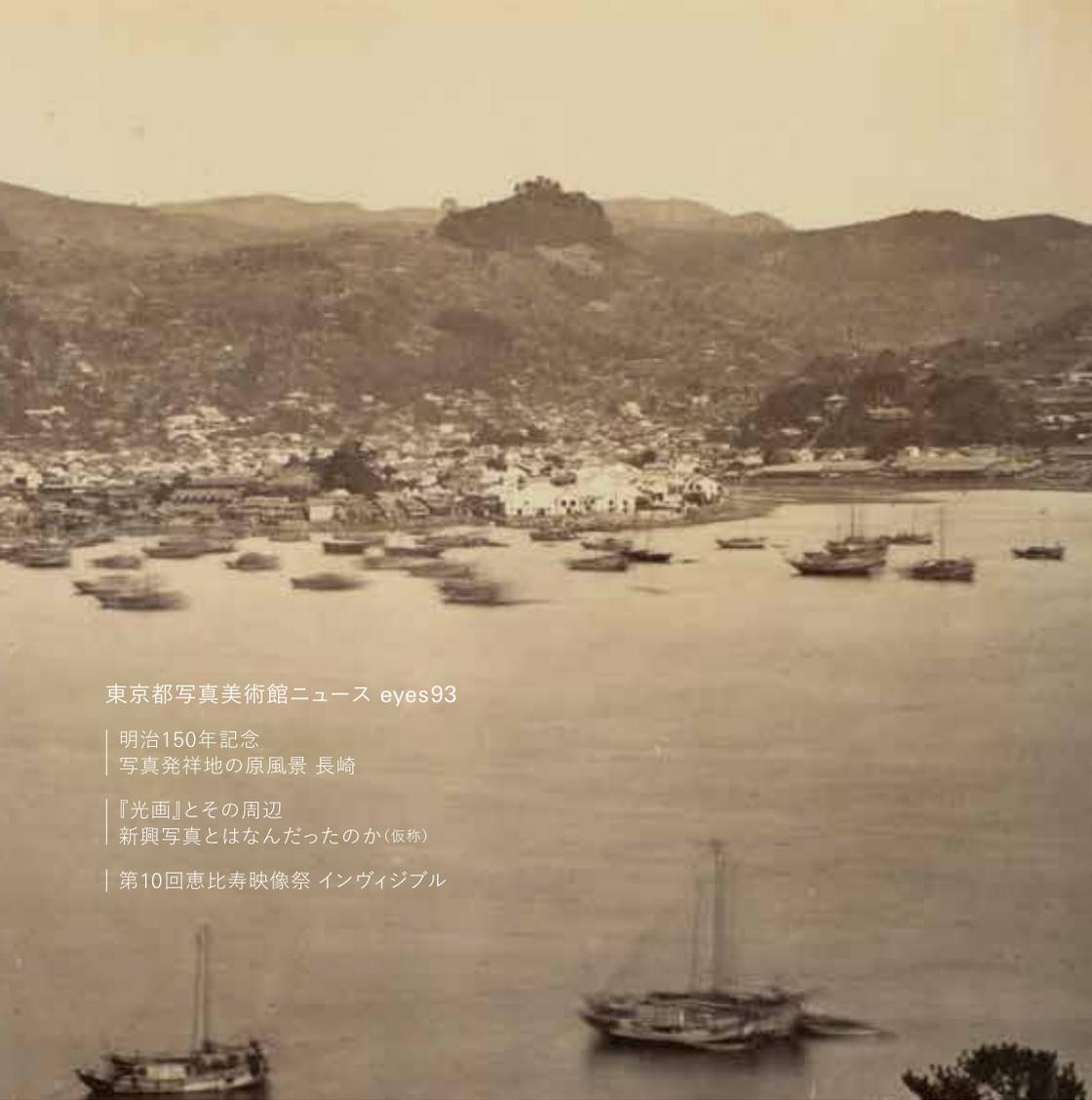


TOP MUSEUM



東京都写真美術館ニュース eyes93

明治150年記念
写真発祥地の原風景 長崎

『光画』とその周辺
新興写真とはなんだったのか(仮称)

第10回恵比寿映像祭 インヴィジブル

明治150年記念

写真発祥地の原風景 長崎

Geneses of Photography in Japan: Nagasaki

2F 2018.3.6 | 火 | - 5.6 | 日 |



(長崎パノラマ)撮影:内田九一 販売:日下部金兵衛 撮影年:明治5(1872)年 鶏卵紙に手彩色 東京都写真美術館蔵

日本における写真文化のセンター的役割を担うという美術館の基本的方針に基づき、東京都写真美術館では、毎年、初期写真に焦点を当てて展示を開催しています。2018年は「写真発祥地の原風景 長崎」を開催します。日本の写真発祥地である長崎では、開国と同時に写真制作がはじまり、近代化の歴史は写真によって記録されました。写真の普及が早ければ早いほど、その土地の写真は多くなります。

海外に開かれた港町として栄えた“異域”長崎では、ピエール・ロシエやフェリーチェ・ベアトなどの外国人写真師が訪れて写真を制作しました。一方、上野彦馬、内田九一をはじめ、薛信二郎、竹下佳治、清河武安、為政虎三などの日本人写真師も誕生し、日本の写真文化が開花する核となります。

本展では、東京都写真美術館が収蔵する上野彦馬『長崎市郷之撮影』、内田九一『西国巡幸写真帖』および同撮影で日下部金兵衛が頒布した《(長崎パノラマ)》、フェリーチェ・ベアト『幕末アルバム』や『ボードイン・アルバム』(長崎大学附属図書館蔵)、伝・堀江鉄二郎《上野彦馬像》(日本大学芸術学部蔵)、『内田九一写真帖』(長崎歴史文化博物館蔵)等の写真作品のほか、川原慶賀《長崎出島之図》(長崎大学附属図書館 武藤文庫)写真をもとに螺鈿で彩られた青貝細工の《長崎風物図箱》や、長崎版画、稀覯本の展示も予定しています。

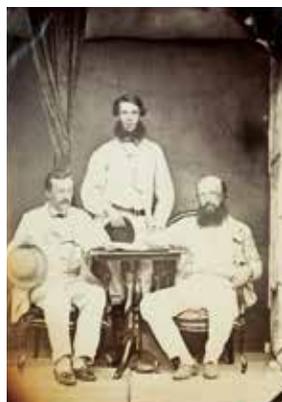
長崎学に造詣の深い姫野順一博士(長崎外国語大学特任教授・長崎大学名誉教授)監修のもと、幕末・明治の長崎を東京都写真美術館の展示室に再構築します。

本展は、明治150年を記念するとともに長崎大学附属図書館「幕末・明治期日本古写真メタデータ・データベース」20周年を記念し、同館と共同で開催いたします。

なお、本展は長崎歴史文化博物館に巡回(5月19日~6月25日)を予定しています。また「写真発祥地の原風景」はシリーズとして展開し、北海道編、東京編の開催を予定しています。

[主催] 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／長崎大学／読売新聞社／美術館連絡協議会 [協賛] ライオン／大日本印刷／損保ジャパン日本興亜／東京都写真美術館支援員 [協力] 長崎県／一般社団法人長崎県観光連盟／長崎市 [観覧料] 一般 700(560)円／学生 600(480)円／中学生・65歳以上 500(400)円 ※()は20名以上の団体料金

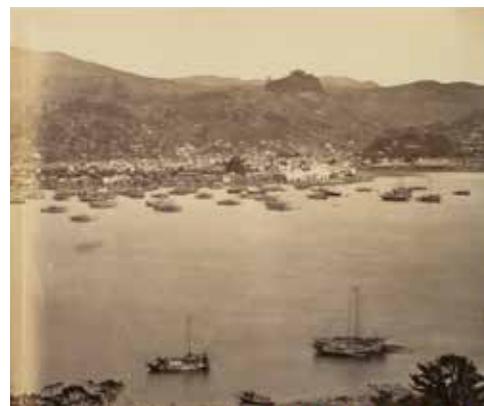
*事業はやむを得ない事情で変更することがございます。



《(ボードイン兄弟とその友人)》
慶応元(1865)年頃 アントニウス・ボードイン 鶏卵紙
所蔵:長崎大学附属図書館



《諏訪之町傘鉾》明治26年(1893) 清河武安 鶏卵紙 所蔵:長崎歴史文化博物館



- 1) 《(長崎パノラマ)》(部分) 文久元(1861)年 カール・ビスマルク 鶏卵紙 東京都写真美術館蔵
- 2) 《(紅毛人遠見之図)》江戸時代後期 制作者不詳 多色刷木版 所蔵:長崎歴史文化博物館
- 3) 《長崎風物図箱》江戸末期頃 制作者不詳 所蔵:長崎歴史文化博物館
- 4) 《(大浦海岸通りの洋館群)》明治7(1874)年頃 上野彦馬 鶏卵紙 所蔵:長崎大学附属図書館
- 5) 《(演劇風景)》文久元(1861)年 アウグスト・ザハトラ 鶏卵紙 所蔵:長崎大学附属図書館
- 6) 《(眼鏡橋)》慶応2(1866)年 フェリーチェ・ベアト 鶏卵紙 所蔵:DIC川村記念美術館



関連イベント

長崎をめぐる初期写真シンポジウム～オリジナルとデジタルアーカイブ～
2018.4.7(土) 14:30-17:30(14:00開場)
将来にわたる初期写真の活用をオリジナルとデジタルアーカイブの両面から討議します。
[会場] 東京都写真美術館1階ホール [定員] 190名
※当日10時より1階ホール受付にて整理券を配布(番号順入場、自由席)

古典技法ワークショップ

コロディオン湿板の制作プロセスを体験するワークショップを開催予定です。詳細は決定次第ホームページで発表します。

担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の第2・第4金曜日14:00より。展覧会チケット(当日消印)をご持参ください。ゴールデンウィーク期間中のギャラリートークは、決定次第ホームページでお知らせします。

『光画』とその周辺

新興写真とはなんだったのか (仮称)

Kōga and its Background: What was the Shinkō Shashin Movement (Tentative)

3F 2018.3.6 | 火 | - 5.6 | 日 |

『光画』とは1932年から1933年までわずか2年足らずしか発行されなかった写真同人雑誌です。A4判変型、グラビアページは片面オフセット印刷、記事や広告が30ページと、大変贅沢なつくりでした。発行部数は500部程度と推定されており、主宰者である野島康三、同人であった木村伊兵衛、中山岩太を中心に関西(浪華写真倶楽部、芦屋カメラクラブなど)のアマチュア写真家をも巻き込み、この時代に登場していた「新興写真」*を牽引しました。

ジョン・ハートフィールド、エドワード・スタイケン、ウジェーヌ・アジェなど外国人作家の作品紹介から、フランツ・ロー、モホイ・ナジの論文の翻訳など、海外の情報も掲載し、第2号から同人として参加した、評論家の伊奈信男が創刊号に掲載した「写真に帰れ」は、日本近代写真史を代表する論文として知られています。

野島康三は戦前の写真界の中心的人物でありながら、同時代の美術界の作家とも交流が深く、画家の萬

鉄五郎、陶芸家の富本憲吉などのパトロ的な存在でした。そうした影響から、この雑誌は写真だけではなく、堀野正雄がグラフィック・モンタージュを、原弘がタイポグラフィについての論文を載せ、衣笠貞之助を招いた映画の座談会の掲載など、幅広い内容を誇る雑誌でした。

大変高いクオリティを持ちながらも、しだいに社会状況が不穏になり、戦争の影響が色濃くなっていく中で、写真家の活動のあり方が変化していき、『光画』は突然の休刊を迎えます。木村や中山はそれからも活発に活動を続け、戦後の日本写真界に多大な影響を与えました。この時代になぜこのような雑誌が生まれたのか、そしてなぜ短い期間で休刊していったのかを辿っていくことによって、1930年代の日本の社会や文化を垣間見ようとする企画です。

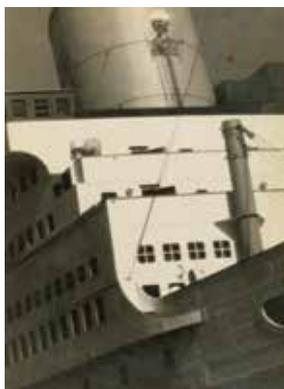
*新興写真とは、それまでのピクトリアリズム(絵画主義写真)とは異なり、カメラやレンズによる機械性を生かし、写真でしかできないような表現をめざした動向



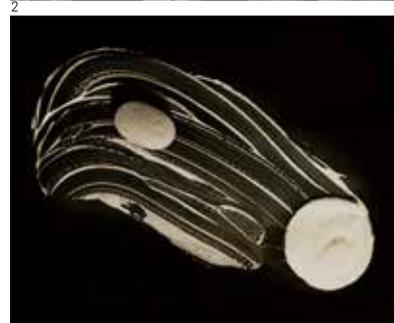
『光画』第1号 1932年(参考図版)



吉川富三《野島康三氏》1930年



佐久間兵衛《汽船》1932年頃



1) 佐久間兵衛《(ビル)》光画 第二巻第三号 表紙 1933年頃 2) 吉川富三《飯田幸次郎君》1932年頃 3) 小石清《クラブ石鹸》1931年 4) 佐久間兵衛《・・・》1932年頃 5) 中山岩太《福助足袋》1930年 6) 岡野一《顔》1932年頃 7) 中山岩太《コンポジション(キャピトル)》1933年 3、4ページに掲載の作品はすべて東京都写真美術館蔵



出品予定作家

野島康三、中山岩太、木村伊兵衛、ハナヤ勘兵衛、佐久間兵衛、堀野正雄、吉川富三、安井仲治、大東元、錦古里孝治、岡野一、堀不佐夫、高麗清治、モホイ・ナジ、ウンボ ほか

関連イベント

会期中に関連イベントを予定しています。詳細は決定次第ホームページでお知らせします。

担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の第1・第3金曜日14:00より。展覧会チケット(当日消印)をご持参ください。

*事業はやむを得ない事情で変更することがございます。

【主催】東京都 東京都写真美術館／読売新聞社／美術館連絡協議会 【協賛】ライオン／大日本印刷／損保ジャパン日本興亜
【観覧料】一般 700(560)円／学生 600(480)円／中高生・65歳以上 500(400)円 ※()は20名以上の団体料金

生誕100年 ユージン・スミス写真展

W. Eugene Smith: A Life in Photography

B1F 2017.11.25|土|-2018.1.28|日|

ユージン・スミス(1918-1978)は、写真史上、もっとも偉大なドキュメンタリー写真家のひとりです。グラフ雑誌『ライフ』を中心に「カントリー・ドクター」、「スペインの村」、「助産師モード」、「慈悲の人」など数多くの優れたフォト・エッセイを発表し、フォト・ジャーナリズムの歴史に多大な功績を残しました。

とりわけ日本とのかかわりが深く、17歳のときニューヨークで偶然であった日系写真家の作品に強い感銘をうけ写真の道を志すきっかけになったこと、太平洋戦争に従軍して、戦争の悲惨で冷酷な現実をカメラで世に伝えんとし自らも沖縄戦で重傷を負ったこと、戦後の日本経済復興の象徴ともいえる巨大企業を取材した「日立」、その経済復興の過程で生じた公害汚染に苦しむ「水俣」の漁民たちによりそった取材などがあります。

本展覧会は、生誕100年を回顧するもので、スミス自身が生前にネガ、作品保管を委託したアリゾナ大学クリエイティブ写真センターによる協力のもと、同館所蔵の貴重なヴィンテージ・プリント作品を約150点展示します。情報あふれる現代社会に生きる私たちにとって、ジャーナリズムの原点をいま一度見つめ直すきっかけになることでしょう。



楽園への歩み1946年 ©2017 The Heirs of W.Eugene Smith

| 関連イベント

1. ユージン・スミスを語る

[講師] ケヴィン・スミス(ユージン・スミス次男)、アイリーン・美緒子・スミス(写真集『水俣』共著者)、レベッカ・センプ(アリゾナ大学CCPチーフ・キュレーター)

[聞き手] 徳山喜雄(ジャーナリスト) ※英語による講演、通訳付き
[日時] 2017.12.3(日)14:00-15:30(開場13:30)

2. ユージン・スミスの生きた時代

[講師] 野町和嘉(写真家)、大石芳野(写真家)
[聞き手] 徳山喜雄(ジャーナリスト)

[日時] 2018.1.14(日)14:00-15:30(開場13:30)

いずれも

[会場] 1階ホール 参加無料(ただし、本展観覧券が必要です)

[定員] 190名※当日10:00より1階総合受付にて入場整理券を配布します。

◎お問い合わせ クレヴィス TEL.03-6427-2806

◎ホームページ http://www.crevis.co.jp

[主催] クレヴィス [共催] 東京都写真美術館 [後援] 公益社団法人日本写真協会/公益社団法人日本写真家協会 [協賛] 株式会社ニコン/株式会社ニコンイメージングジャパン [協力] アリゾナ大学クリエイティブ写真センター

[観覧料] 一般 1,000(800)円/学生 800(640)円/中高生・65歳以上 600(480)円 ※()は20名以上の団体料金

※年末年始の開館日等は本誌スケジュール下およびホームページをご覧ください。

第10回恵比寿映像祭

Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions 2018



インヴィジブル Mapping the Invisible

Friday, 2/9 – Sunday, 2/25 / 2018 [15days / Closed Tue.13, Mon.19]

平成30年2月9日(金)～2月25日(日)《15日間・13日(火)、19日(月)休館》

会場 / 東京都写真美術館、日仏会館、ザ・ガーデンルーム、恵比寿ガーデンプレイス センター広場、地域連携各所 (ほか時間 / 10:00～20:00 ※最終日は18:00まで 入場 / 無料 ※定員制のプログラム(上映、ライブ、レクチャーなど)は有料

[主催] 東京都写真美術館・アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団) / 日本経済新聞社

[共催] サッポロ不動産開発株式会社 / 公益財団法人日仏会館 [後援] TBS / J-WAVE 81.3FM

[協賛] ANA / 東京都写真美術館支援会員 [協力] びあ株式会社 / ドゥービー・カンパニー株式会社 / 株式会社ロボット

TOP MUSEUM

無垢と経験の写真 日本の新進作家 vol.14

Photographs of Innocence and of Experience: Contemporary Japanese Photography vol.14

2F 2017.12.2 | 土 | - 2018.1.28 | 日 |

いまを生きる
私たちのまなざしによって
見つめ返したい。

鈴木のぞみ “Monologue of the Light” より

「日本の新進作家」展は、写真・映像の可能性に挑戦する創造的精神を支援し、将来性のある作家を発掘するため、新しい創造活動の展開の場として2002年より開催しています。14回目となる本展では、日々の生活の中から純粋な個々人の経験を紡ぎ、多様なアプローチで削りだしている作家5名の写真表現を最新作と共にご紹介します。5名の表現は私達への問いとなり、その考察や反応がまたアーティストへと返り、未来の表現へと活かされていきます。いまと未来をつなぐ対話は、地域や世代を超えて響き合い、やがて増幅して、大きな渦を起こす契機となることでしょう。作家達の無垢の表現が展開し、経験が蓄積していく場へご来場ください。



〈While Leaves are falling...〉より《家族 箱根にて》2009年
インクジェット・プリント ©Takahiro Kaneyama

▲ 金山貴宏 / かねやま たかひろ

1971年東京都生まれ、1993年渡米。NY市立大学シティカレッジ、スクール・オブ・ヴィジュアルアーツ大学院を経て、ICPドキュメンタリー学科在籍中からフリーランスの写真家として活動。「Making a Home: Japanese Contemporary Artists in NY」展 (Japan Society, NY, 2007-08年) 等で注目され、特に『While Leaves are falling...』(2016)の写真集(赤々舎)、展覧会(新宿ニコソサロン)で、2017年、さがみはら写真新人奨励賞を受賞。このシリーズは作家が20歳の時、実母が統合失調症を発症。言動が全く別人のようになり、入院生活を送る実母と2人のおば(実母の姉妹)の記録である。作家がNYから帰国し、4人旅を繰り返す、現在進行形の作品群。

■ 鈴木 のぞみ / すずき のぞみ

1983年埼玉県生まれ、東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻領域卒業後、東京藝術大学大学院先端芸術表現専攻修士課程を経て、現在、博士後期課程在籍。2012年頃より、アトリエ兼自宅の中で、扉の鍵穴や引出し等、生活環境の中の「穴」を利用したピンホール印画の作品を制作。取り壊される家や不要となった窓を枠ごと保管し、窓ガラスが映していた風景を記録する作品等でアートアワードトーキョー丸の内2015フランス大使館賞やVOCA展2016奨励賞等を受賞。制作は、コーヒードリッパーや鍋の穴を用いたピンホール作品や、実際に使用していた鏡に映っていたであろう人や風景を印画した作品など多岐に及んでいる。

〈Other Days, Other Eyes〉より《久仁屋工場2階の窓》2013-17年、窓ガラスに写真乳剤 ©Nozomi Suzuki Courtesy of rin art association (撮影:木暮伸也)



《子供の足の私》2011年 発色現像方式印画 ©Mari Katayama

■ 片山真理 / かたやま まり

1987年埼玉県生まれ、群馬県育ち。幼少期より裁縫に親しむ。9歳の時、先天性四肢疾患により両足を切断。群馬県立女子大学文学部美学美術史学科卒業後、東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻、修了。手縫いの作品や装飾を施した義足等と共にセルフポートレイトを制作。あいちトリエンナーレ(2013年)、「六本木クロッシング」(森美術館、2016年)等。2011年より特製のハイヒールを履き、歌手やモデルとしてステージに立つ「ハイヒールプロジェクト」を実施。その他、講演、執筆など活動は多岐にわたる。今年7月出産後に制作した作品を初公開。

インタビューをホームページで
近日公開予定。詳細はこちら▶



武田慎平 / たけだ しんぺい

1982年に両親の故郷、福島県で生まれ、千葉県で育つ。2002年以降NYで写真制作を行うかたわら、ビデオ・アーティストとして作曲家等とコラボレーションを中心とした制作活動を行う。近年、カメラを使用せず制作するフォトグラム作品を手がける。東日本震災後、名所や旧跡の土を用い、放射線で感光させたフォトグラム作品(Trace(痕))が高く評価され、「A Different Kind of Order: The ICP Triennial」(ICP, NY, 2013年)、「In the Wake」(ボストン美術館他、2015年)等多数の国際展に参加。2014年帰国、2015年より宮城県仙台市在住。自然作用の様々な要素から制作する新シリーズ(Glaze(釉))を制作。

制作風景をホームページで公開中。詳細はこちら▶



〈Trace(痕)〉より《#7 二本松城》2012年
ゼラチン・シルバー・プリント ©Shimpei Takeda

■ 吉野英理香 / よしの えりか

1970年埼玉県生まれ、1989年から写真作品の制作を開始し、1994年に東京総合写真専門学校を卒業。写真家 鈴木清の影響を受けながら、日常的な風景を撮り続け、モノクロ作品を制作。2010年からカラー作品の制作を開始し、2011年に『ラジオのように』(オシリス)を発表、その言葉に尽くしがたい独特の雰囲気が高評価される。「Polypolis: Art from Asian Pacific Megacities」(ハンブルク市美術館、2001年)、「Black Out: Contemporary Japanese Photography」(ローマ日本文化会館他、2002年)等の国際展に参加。2016年、撮りためた大量の作品から抽出して編んだ写真集『NEROLI』(赤々舎)が注目される。本展では、『NEROLI』の続編ともいえる新シリーズを初公開。

〈NEROLI〉より《Untitled》2013年 発色現像方式印画
©Erika Yoshino Courtesy of Taka Ishii Gallery Photography / Film

*作品はいずれも作家蔵



| 関連イベント 《アーティスト対談》

- 12.3 (日) 15:30-17:00 武田慎平×小澤慶介(アート/インディペンデント・キュレーター)
 - 12.9 (土) 15:30-17:00 吉野英理香×金子隆一(写真史家)
 - 12.16(土) 15:30-17:00 鈴木のぞみ×小原真史(キュレーター/映像作家)
 - 1.11 (木) 18:00-19:30 片山真理×小谷元彦(美術家/彫刻家)
 - 1.13 (土) 15:30-17:00 金山貴宏×姫野希美(赤々舎代表取締役/ディレクター)
- 【会場】1階スタジオ 【定員】各回50名 ※当日10時より1階総合受付にて整理券を配布

| 担当芸員によるギャラリートーク

会期中の第2、第4金曜日14:00より。展覧会チケット(当日消印)をご持参ください。

*事業はやむを得ない事情で変更することがございます。



制作風景の動画をホームページで
公開中。詳細はこちら▶



【主催】公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館/東京新聞 【協賛】凸版印刷株式会社/東京都写真美術館支援会員
【観覧料】一般 700(560)円/学生 600(480)円/中高生・65歳以上 500(400)円 ※()は20名以上の団体料金
※2018年は1月2日は無料、1月3日は団体料金 ※年末年始の開催日等は本誌スケジュール下およびホームページをご覧ください。

アジェのインスピレーション ひきつがれる精神

Eugène Atget: The Eternal Inspiration

3F 2017.12.2 | 土 | - 2018.1.28 | 日 |



左)ウジェーヌ・アジェ《日食の間》1912年 セラチン・シルバー・プリント 右)ウジェーヌ・アジェ《(木)》1910-20年 油彩／キャンバス(厚紙に貼付)



写真の歴史に燦然と輝く、ウジェーヌ・アジェの功績

ウジェーヌ・アジェは19世紀末から20世紀初頭にかけて、パリとその周辺を捉えた写真家です。1898年、41歳の時から30年間にわたって8,000枚以上の写真を撮影し、歴史的建造物や古い街並み、店先や室内、看板、公園、路上で働く人々など、近代化が進み、消えゆく運命にあった「古きパリ」を体系的に記録し、図書館や美術館、博物館などの公的機関や画家、建築家等のアーティストたちに販売しました。その顧客にはレオナルド・フジタもいます。

晩年から没後に評価されたアジェ

アジェは孤高の写真家と称されることも多く、ひとり黙々と撮影に取り組みましたが、亡くなる2年前頃よりにわかに注目されはじめます。偶然にも、同じ通りにス

タジオを持っていたマン・レイがアジェの写真からシュルレアリストと共通するものを感じ取り、『シュルレアリスム革命』誌に取り上げたのです。この頃から、アジェの作家性にスポットライトが当たりはじめました。

さらに、当時、マン・レイの助手をしていたベレニス・アボットが、アジェの死後、散逸の危機にあったプリントやガラス乾板を、ニューヨークのギャラリスト、ジュリアン・レヴィの助けを借りて買い取り、アメリカで広めていきました。その後、写真史家や美術館のキュレーターたちによって研究が進められ、アジェは近代写真の先駆者として位置づけられていきます。

多くのアーティストに影響を与えたアジェ
その謎はいまだ多い

しかしながら、アジェはいまだに謎めいたところのある写真家です。生前のアジェ自身のコメントがあまり残されていないこともあり、彼の作品について多く

【主催】東京都 東京都写真美術館
【観覧料】一般 600(480)円／学生 500(400)円／中学生・65歳以上 400(320)円 ※()は20名以上の団体料金
※2018年は1月2日は無料、1月3日は団体料金 ※年末年始の開館日等は本誌スケジュール下およびホームページをご覧ください。

の人たちが様々な想像を巡らせ、その真実に迫ろうとしてきました。

アジェに憧憬を抱き、手本としてきた写真家たちは後を絶ちません。彼らがアジェの写真に見いだしたものはいったいなんだったのか。本展は、アジェの同時代の写真表現と、アジェの先達となる写真家の作品も併せて展示し、紐解こうとするものです。

ウジェーヌ・アジェ

1857年、フランス南西部リブルヌに生まれる。幼い頃に両親を亡くして孤児となる。1879年、パリ国立演劇学校に入学するが、兵役のため中退。1887年頃にフランス北部ソナムに移り住む。写真を撮り始めたのはこの頃と推測される。1890年初頭、パリに戻り、アパートのドアに「芸術家のための資料」という看板を掲げて写真を売り始めた。パリの古き良き部分が、次第に失われてゆくのを目の当たりにし、1890年の終わり頃から写真によるパリのコレクションを始める。1925年、マン・レイ(1890-1976)とそのアシスタントであったベレニス・アボット(1898-1991)と出会ったアジェは、シュルレアリスムの芸術家から高い評価を受ける。1926年、ジュリアン・レヴィ(1910-1980)と出会う。1927年没。

アジェを評価した4人のキー・パーソン

- ▶マン・レイ
アジェの才能を見いだした、シュルレアリスムの鬼才
- ▶ベレニス・アボット
アジェに傾倒 作品の購入・管理・出版に力を尽くした
- ▶ジュリアン・レヴィ
アジェをいち早くアメリカで紹介した写真ギャラリスト
- ▶ジョン・シャーコフスキー
アジェを近代写真の始点と位置づけ「巨匠」と知らしめたMoMA写真部門ディレクター

受け継がれてきた、アジェのスピリット。
当館の多彩なコレクションから
20世紀から現代まで、さまざまな作家を紹介します。

出品予定作家

ウジェーヌ・アジェ、マン・レイ、シャルル・マルヴィル、アルフレッド・スティューグリッツ、ベレニス・アボット、ウォーカー・エヴァンズ、リー・フリードランダー、ジャン＝ルイ・アンリ・ル・セック、荒木経惟、森山大道、深瀬昌久、清野賢子(12作家、約155点)

出品作品はすべて東京都写真美術館の収蔵作品です。



荒木経惟〈写真論〉より 1988-89年 セラチン・シルバー・プリント



シャルル・マルヴィル《パリ市庁舎、パリコムーンの前》1871年 鶏卵紙



マン・レイ《醒めて見る夢の会》1924年 セラチン・シルバー・プリント

【関連イベント】《関連トーク》

「ウジェーヌ・アジェの写真を紐解く」
2017.12.8(金) 18:00-19:30 横江文憲(写真評論家)
「ウジェーヌ・アジェの写真集をめぐる」
2018.1.5(金) 18:00-19:30 金子隆一(写真史家)
【会場】東京都写真美術館 1階スタジオ
【定員】各50名 ※当日10時より1階総合受付にて整理券を配布します。

【担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の第1・第3金曜日14:00より。観覧券チケット(当日消印)をご持参ください。

*事業はやむを得ない事情で変更することがございます。

最新の上映スケジュールはこちら▶



1F ポーランド映画祭2017

今年で6年目を迎えるポーランド映画祭。多くの映画作品に影響を与えてきた傑作古典から、改めて発掘された知られざる名作、そして次世代を担う若手監督たちによる最新作まで、ポーランド映画の注目作を厳選してお届けします。常に進化し続けるポーランド映画の世界を、ぜひご堪能ください。

[上映期間] 2017.11.25(土)~12.15(金)
 [休映日] 11.27(月)、12.3(日)、12.4(月)、12.11(月)
 [料金] 当日券:一般1,500円/大学生・高校生・中学生以下・障がい者手帳をお持ちの方1,000円/シニア1,100円 各種割引あり
 [タイムテーブル] 詳細はホームページをご覧ください。

〈お問い合わせ先〉 マーメイドフィルム 03-3239-9401
 〈映画公式サイト〉 <http://www.polandfilmfes.com/>

上映作品

タイムテーブルは
▼こちら▼



『早春』、『イレブン・ミニッツ』、『ブレイグラウンド』、『アート・オブ・ラビング』、『オラとニコデムの家(映画祭題)』、『二つの冠』、『ゆれる人魚』、『ユダヤ人を救った動物園 アントニーナが愛した命』、『ソラリスの著者』、『寄せ集め』、『アイスホッケー』、『クラシック・バイアスロン』、『人生の舞台』、『フェンシング選手』、『フランツ・クラマーとスキーの風景』、『コルチャック先生』、『カティンの森』、『残像』、『影』、『夜行列車』、『尼僧ヨアンナ』、『太陽の王子ファラオ』、『灰とダイヤモンド』、『ズビシェク』、『最後の家族』、『ベクシンスキー家の人々 映像と音声のアルバム』、『ツィーゲノルト』、『黒』、『魔法のえんぴつ』、『ポレック&ロレック』、『イマジジン』、『イーダ』、『ユナイテッド・ステイツ・オブ・ラブ』



「夜行列車」



「カティンの森」
©2007 Telewizja Polska S.A. All Rights Reserved



「ポレック&ロレック」
©Studio Filmów Rysunkowych



「二つの冠」
©Kondrat - Media



「アート・オブ・ラビング」
©TVNSA, Orange Polska SA, Next Film, Plast Service Pack



「ベクシンスキー家の人々
映像と音声のアルバム」

各種割引

以下の方は当日料金が割引になります。
 当館バスポート会員証提示、当館での展覧会・映画の半券提示、三越カード・伊勢丹カード・アトレビューSuicaカード提示、(公財)東京都歴史文化財団が管理する施設の友の会会員証・年間バスポート提示 ※上映によって割引料金が異なります。詳細はお問い合わせください。

事業内容は予告なく変更される場合があります。最新の情報はホームページをご覧ください。

支援協議会報告

2017年度支援会員企業交流会を開催しました

東京都写真美術館では、写真・映像文化を愛する多くの企業・法人の皆様に支援協議会の支援会員になっていただき応援をいただいております。支援協議会では、会員企業様等のCSR活動、文化活動のご紹介と見学、相互交流を目的として「企業交流会」を実施しています。2017年度は第5回として株式会社ニコン様のご協力でニコンミュージアム見学(5月)、第6回を全日本空輸株式会社(ANA)様にご協力いただき、羽田整備センターにて機体工場見学を実施しました。両日共に見学の後に会員懇談会を行い、各企業様同士の交流を深めました。

参加企業の皆様にご支援の御礼・ご挨拶



写真映像文化振興
支援協議会
苅谷理事長



東京都写真美術館
伊東館長

第5回 企業交流会

日時:2017年5月23日(火) 場所:株式会社ニコン(ニコンミュージアム) 参加人数:41社76名様

CSR活動のご紹介、カメラ開発の歴史等の講演、歴代カメラの展示観覧等、ご参加の皆様にお楽しみいただきました。ニコン様創立100周年記念事業の一環で品川にオープンしたニコンミュージアムは開発の歴史、数多くの製品、技術の紹介ほか大変中身の濃い展示施設が充実、皆様興味深くご覧いただきました。



第6回 企業交流会

日時:2017年10月11日(水)
 場所:全日本空輸株式会社(ANA)羽田整備センター 参加人数:39社69名様

世界の航空会社を評価する機関であるSKYTRAX社から5年連続5スター評価を得るANAの安全運航を支える整備部門のお話、CSR活動の紹介等を聴講の後、機体工場見学ツアーを行いました。航空機写真家 ルーク・オザワ氏の特別講演「楽しきヒコキ写真の世界」も大好評でした。



支援会費は、写真・映像収蔵品を充実させるとともに新進作家の発掘と育成、自主企画展等の充実、国際交流の促進、国内関係先との交流等の活動に充当させていただいております。支援会員の詳細は、ホームページの「サポート」をご覧ください。

支援会員

東京都写真美術館の活動をご支援いただくため、
次の企業・団体に支援会員としてご入会いただきました。

《特別賛助会員》
キヤノン(株)
(株)資生堂
全日本空輸(株)
(株)ニコン

《賛助会員》
キヤノンマーケティングジャパン(株)
ゲッティイメージズジャパン(株)
大日本印刷(株)
東急建設(株)
凸版印刷(株)
富士フィルム(株)
(株)リコー

《特別支援会員》
アサヒグループホールディングス(株)
サッポロ不動産開発(株)
サッポロホールディングス(株)
(株)パラゴン

《支援会員》
(株)I&S BBDO
あいおいニッセイ同和損害保険(株)
アオイネオン(株)
(株)AOI Pro.
(株)アサソー ディ・ケイ
旭化成(株)
朝日新聞社
(株)朝日新聞出版
朝日生命保険(相)
アスクル(株)
(有)アスペン/POLARIS
(株)アマナ
(株)岩波書店
ウェスティンホテル東京
(株)潮出版社
内田写真(株)
(株)栄光社
(株)エージーピー
(株)エスジー
(株)ADKアーツ
(株)NHKアーツ
NHK営業サービス(株)
(株)NHKエデュケーション
(株)NHKエンタープライズ
(株)NHKグローバルメディアサービス
(株)NHK出版
(株)NHKビジネスクリエイト
(株)NHKメディアテクノロジー
エプソン販売(株)
エルメス財団
オリックス(株)

オリンパス(株)
(株)オンワードホールディングス
花王(株)
カシオ計算機(株)
鹿島建設(株)
(株)KADOKAWA
カトーレック(株)
神奈川新聞社
(株)かんぽ生命保険
(株)キクチ科学研究所
(株)キタムラ
キッコマン(株)
(株)紀伊國屋書店
ギャラリー小柳
共同印刷(株)
(一社)共同通信社
空港施設(株)
(株)久米設計
グローリー(株)
ケンコー/トキナー/スリック
興亜硝子(株)
(株)弘亜社
(株)廣濟堂
(株)講談社
(株)光文社
(株)国書刊行会
(株)コスモスインターナショナル
(株)コーセー
コダック(同)
コダックアラリスジャパン(株)
(株)コパヤシ
小山登美夫ギャラリー(株)
(株)ザ・アール
三機工業(株)
産経新聞社
サントリーホールディングス(株)
(株)サンライズ
JXホールディングス(株)
ジェイアール東日本企画
JSR(株)
JXホールディングス(株)
ジェイティービー印刷(株)
(株)シゲマ
(株)実業之日本社
信濃毎日新聞社
(株)写真弘社
写真の学校/東京写真学園
チャンネル(株)
(株)集英社
(株)主婦と生活社
(株)主婦の友社
(株)小学館
城西国際大学メディア学部
松竹(株)
信越化学工業(株)
(株)新潮社
(株)スタジオアリス

(株)スタジオエムジー
(株)スタジオジブリ
スターツ出版(株)
(株)SUBARU
住友化学(株)
住友生命保険(相)
(株)スリーポンド
(株)生活の友社
セイコーホールディングス(株)
(株)青春出版社
成美製版(株)
積水ハウス(株)
双日(株)
ソニー(株)
損害保険ジャパン日本興亜(株)
第一生命保険(株)
第一法規(株)
(株)ダイケンビルサービス
台新国際商業銀行
大成建設(株)
(株)大丸松坂屋百貨店
大和証券(株)
(有)タカ・イシイギャラリー
高砂熱学工業(株)
(株)高島屋
(株)宝島社
(株)竹中工務店
玉川大学芸術学部
(株)タムロン
(株)丹青社
千葉商科大学政策情報学部
(株)中央公論新社
中外製薬(株)
帝人(株)
(株)TBSテレビ
デジタル・アドバタイジング・コンソーシアム(株)
(株)テレビ朝日
(株)テレビ東京
電源開発(株)
(株)電通
東亜建設工業(株)
東映(株)
東京海上日動火災保険(株)
東京急行電鉄(株)
東京工芸大学
東京新聞・中日新聞社
(株)東京スタディオ
東京造形大学
東京総合写真専門学校
東京テアトル(株)
東京都競馬(株)
(株)東京ドーム
(株)東京ニュース通信社
(学)専門学校 東京ビジュアルアーツ

(株)東京美術倶楽部
東京メトロポリタンテレビジョン(株)
(株)東芝
東宝(株)
(株)東北新社
(株)東洋経済新報社
(株)東洋熱工業(株)
(株)トキワ
(株)徳間書店
戸田建設(株)
トヨタ自動車(株)
(株)トロンマネージメント
(株)ニコンイメージングジャパン
日外アソシエーツ(株)
日油(株)
日活(株)
(株)日経BP
日光ケミカルズ(株)
日産自動車(株)
(株)日本カメラ社
日本空港ビルデング(株)
日本経済新聞社
(株)日本広告社
(株)日本広告写真家協会
日本コルマー(株)
(株)日本色材工業研究所
日本写真印刷(株)
(株)タムロン
(公社)日本写真協会
日本写真芸術専門学校
(株)中央公論新社
日本大学芸術学部
日本たばこ産業(株)
日本テレビ放送網(株)
(株)ニッポン放送
日本ロレックス(株)
(株)ニューアートディフュージョン
ノーリツ鋼機(株)
野村證券(株)
(株)博報堂
(株)博報堂DYメディアパートナーズ
(株)博報堂プロダクツ
(株)バス・コミュニケーションズ
(株)ハースト婦人画報社
(株)ハーツ
パナソニック(株)
バリ ミキ
ぴあ(株)
ビービーメディア(株)
(株)東京ドーム
東日本旅客鉄道(株)
光写真印刷(株)
(株)ピクトリコ

(株)美術出版社
(株)ビックカメラ
(株)ビデオプロモーション
(株)ビラミッドフィルム
(株)ファーストリテイリング
(株)フェドラ
(株)フォトメディア
(株)フジテレビジョン
(株)双葉社
(株)ブラザークリエイト
(株)プリンスホテル
(株)フレームマン
(株)文化工房
(株)文藝春秋
ベルボン(株)
北海道新聞社
(株)ホテルオークラ東京
(株)堀内カラー
本田技研工業(株)
毎日新聞社
(株)マガジンハウス
丸善(株)
マルミ光機(株)
(株)マンダム
(株)みずほ銀行
三井住友海上火災保険(株)
三井倉庫ホールディングス(株)
三井不動産(株)
(株)三越伊勢丹 三越恵比寿店
三菱地所(株)
三菱製紙(株)
三菱倉庫(株)
三菱電機(株)
三菱UFJ信託銀行(株)
(株)ミルボン
武蔵大学
明治安田生命保険(相)
森ビル(株)
ヤマトロジスティクス(株)
横河電機(株)
(株)吉野工業所
(株)ヨドバシカメラ
読売新聞社
ライオン(株)
ライカカメラジャパン(株)
リコーイメージング(株)
リシュモン ジャパン(株)
モンブラン
(株)良品計画
(株)ロボット
(株)ワコウ・ワークス・オブ・アート
(株)ワコール

2F SHOP
ミュージアム・ショップ

NADIFT
BAITEN

展覧会関連書籍はもちろん、季節のグッズも大充実のミュージアムショップ。寒い冬にほっと温まる、ギフトにもおすすめの新品も続々と入荷中です。

All about Saul Leiter 2,700円
タッチパネル対応手袋「EVOLG」 3,024円～
(価格はすべて税込)



営業時間/10:00-18:00(木・金は20:00まで)
TEL/03-6447-7684
定休日/毎週月曜日(そのほか美術館の休館日に準じます)

1F CAFE
カフェ

MAISON ICHI
BOULANGER-PÂTISSIER-TRAITEUR-CHARCUTIER

LUNCH MENU (11:30-15:00)
本日のキッシュ(自家製パン付き) 1,080円
スベルト小麦田舎パンのクロックマダム 1,080円
季節のスープとデリプレート(自家製パン付き) 1,296円

自家製パン、ドリンクはお持ち帰りできます
キッシュ各種 538円 自家製サンド 480円～
タルト各種 430円
スベルト小麦の田舎パン 1/4サイズ 430円 ホール1,620円
コーヒー 540円/ティー 540円 ジュース・アルコール類もあります。
メニューは予告なく変更される場合があります。(価格はすべて税込)



営業時間/10:00-19:00(木・金は20:00まで)
TEL/03-6277-3862 定休日/毎週月曜日(そのほか美術館の休館日に準じます)



SCHEDULE / スケジュール

展覧会・イベント・上映の最新情報は、
topmuseum.jpまたはこちらへ▶



	3F	2F	B1F	1F
2017 11			生誕100年 ユージン・スミス写真展	ポーランド映画祭2017 11.25(土)–12.15(金)
12	TOP Collection アジェのインスピレーション ひきつがれる精神 (取) 12.2(土)–2018.1.28(日)	無垢と経験の写真 日本の新進作家 vol.14 12.2(土)–2018.1.28(日)	11.25(土)–2018.1.28(日)	
2018 1				
2	第10回恵比寿映像祭 インヴィジブル 2018.2.9(金)–2.25(日)			
3			APAアワード2018 2018.3.3(土)–3.18(日)	
4	『光画』とその周辺 新興写真とは なんだったのか(仮称) (取) 2018.3.6(火)–5.6(日)	明治150年記念 写真発祥地の原風景 長崎 2018.3.6(火)–5.6(日)	清里フォト・ミュージアム 収蔵作品展 原点を、永遠に。–2018– 2018.3.24(土)–5.13(日)	
5				

(取)「ぐるっとパス 2017」対象の展覧会 | 「ぐるっとパス 2017」の詳細はこちら▶



割引料金について

割引対象

展覧会を割引料金にご観覧いただけます

1. 20名以上の団体のお客様 観覧料が2割引
2. 各種会員の方 観覧料が2割引
 - アトレビューSuicaカード
 - MIカード(三越伊勢丹グループのクレジットカード)
 - ウエルカムカード(訪日外国人向けの割引カード)
 - 当館映画鑑賞券提示者
 - 財団他館友の会、年間パスポート会員
 - JR東日本「大人の休日倶楽部」カード
3. 親子ふれあいデー(毎月第3土曜日と引き続き日曜日が対象) 観覧料が5割引
 - 都民で18歳未満のお子様を連れたご家族が対象です。 ※詳しくはお問い合わせください。

無料対象

展覧会を無料でご観覧いただけます

1. □小学生以下
 - 障がい者手帳提示者及びその介護者(2名まで)
 - 被爆者手帳提示者及びその介護者(2名まで)
 - 愛の手帳・療育手帳提示者及びその介護者(2名まで)
 - 精神障害者福祉手帳提示者及びその介護者(2名まで)
 - 東京都内在住・在学の中学生

※教育活動(スクールプログラムなど)で当館をご観覧希望の生徒と引率者は事前申告が必要です。 当館までお問い合わせください。
2. シルバーデー(毎月第3水曜日)
 - 65歳以上の方 ※証明できるものの提示が必要です

トップのお正月
年始特別開館の
お知らせ

新年は2018年1月2日(火)11:00より開館

1月2日は2階・3階展示室が無料!

雅楽演奏「とっふ雅楽」、ミュージアム・ショップの福袋など、トップの新年をお楽しみください。最新情報はホームページをご確認ください。



雅楽演奏「とっふ雅楽」

東京都写真美術館

TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM



〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 Tel.03-3280-0099 topmuseum.jp

JR恵比寿駅東口より徒歩約7分、東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩約10分※当館には専用駐車場はありません。恵比寿ガーデンプレイスの駐車場を御利用ください。

開館時間 10:00–18:00(木・金は20:00まで)。ただし2018年1月2日・3日は11:00–18:00。入館は閉館の30分前まで。
休館日 毎週月曜日(月曜日が祝日の場合は開館、翌平日休館)、年末年始(12月29日–2018年1月1日 ※4階図書室は1月4日まで)、
1月29日–2月8日、2月26日–3月2日

東京都写真美術館ニュース「アイズ17」93号 □発行日:2017年12月1日/企画・編集:東京都写真美術館事業企画課 普及係 □印刷・製本:株式会社公栄社 □発行:公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館©2017 □本誌掲載の記事、写真の無断複写、複製を禁じます。※本誌編集ページに掲載されている観覧料は、原則として消費税込みの価格です。事業内容は予告なく変更される場合があります。最新の情報はホームページをご覧ください。